



筑摩世界文學大系

76

ショーロホフ

I

江川 卓 訳



筑摩書房

筑摩世界文學大系 76

昭和四十八年九月五日

初版第一刷発行

シヨロホフ I

訳者 江川 卓

発行者 井上 達三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京二九二七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20676 (出版社) 4604

目次

静かなるドン

江川卓訳

第一巻

5

第二巻

226

解説

江川卓

443

年譜

452

シ
ョ
ー
ロ
ホ
フ
I

静かなるドン

第一巻

犁^{すき}もてはおこさず 名も高きわれらが土

地は……

名も高きこの土地は 馬のひづめに耕され、

名も高きこの土地に 時^{とき}かれしはコサックの頭^{くぶ}、

静かなるドンを飾るが若後家ならば、

父なるドンに咲きみつは親なし子たち、
ああ ドンの河波は 父御母御の涙にみ

ちる。

*

おお それ われらが父 静かなるドン！

おお なぜに 静かなるドン 河水にこり流るるや？

ああ いかに 静かなるドン 河水にこらず流れよう！

わがドンの水の底より 冷たき清水はわくものを

わがドンの河水に棲^すむ 白き魚の水にこそ

コサック古謡

第一部

一

メレホフの屋敷は、部落も一番のはずれにある。小さな門が、家畜置場から北方のドン河へ通じている。緑に苔むした白堊岩の岩間づたいに、十五、六メートルもの急な坂を下ると、そこがもう河岸だ。一面、真珠のように貝殻をちりばめ、波にねぶられてまるくなった灰色の小石の縁どりがうねうねとつづく向うは、風を受けて青黒いさざ波にわきかえるドンの奔流である。東は——打穀場の楊の垣をへだてて、ゲトマンスキイ街道に面し、白っぽい蓬や、馬の蹄に踏みじられた精の強い褐色のにわやなぎの草むら、追分道^{おきわけみち}には礼拝堂が立ち、その先には、薄もやのきぬをなびかせた一望の曠野がつづく。南からは——白堊岩の山々がせまり、西には——広場をぬけて出水あとの草地まで、通りが走っている。

前々回のトルコ戦争（一八五三—五六年のい）のとき、一人のコサック、プロコフ・フィイ・メレホ

フが部落へ戻って来た。彼はトルコから女房をつれてきた。すっぱりとシヨールにくるまった小柄な女で、いつも顔をかくし、めったにその憂わしげな、人づきのわるい目をのぞかせることがなかった。絹のシヨールは遠い異国の神秘的な香りをただよわせ、その虹色の模様は女たちのねたみの的であった。とらわれのトルコ女は、プロコフ・フィイの肉親たちとも打ちとけようとしなかった。そこでメレホフ老人は、まもなく息子を別居させ、彼の家へは、この辱しめを根にもって、死ぬまで足を向けなかった。

プロコフ・フィイはまもなく家を建てた。丸太づくりの母屋を大工たちにつくらせ、家畜置場の仕切りは自分でして、秋には、猫背の異人の女房を新しい住居へつれていった。家財道具を積んだ荷馬車について、二人が部落を歩いて行くと、子供も大人もみな往来へとびだした。コサックたちはひげの奥でしのび笑い、女たちは大声で叫びかわし、きたならしい子供たちがぞろぞろとあとを歩いて歩いて、プロコフ・フィイのことをはやしたてた。しかし彼は、袖なし外套の前をはだけて、まるで畑のくろでも歩くように、ゆっくりと歩いて行った。黒い手のひらに妻のきしゃな手首をしっかりと握りしめ、白っぽい前髪をたらした頭を隠す色もなくもたげていた。ただ、頬骨の下にもりあがった筋肉がひくひくとふるえ、いつもながらびくとも動かぬ石のような眉のあいだに、汗の玉がにじみ出ている。

そのとき以来、部落ではめったに彼の姿を見

かけなくなった。部落の寄合いにも顔を出さず、ドンにのぞんだはずれの自分の家にひきこもったきり、つきあひもせずに暮らしていた。部落では、彼についているいろと妙な噂をたてた。子牛の放牧を見張っている村童たちは、なんでも夕方、夕焼けの色があせる時分になると、プロコフイが女房を両手にかかえて、タタール塚までも連れて行くのを見るとか言いふらした。塚のいただきの、長の年月むしばまれた穴だらけの岩に妻の背をもたせ、自分もそのわきに腰をおろして、長いこと曠野を眺めている。夕焼けがすっかり消えてしまふまで眺めていて、それからまたプロコフイは女房を外套にくるみ、両手にかかえて家へつれ戻るのであった。このような奇妙な行為をどう説明していいものやら、部落ではすっかり途方にくれてしまった。女たちはおしやべりに夢中で、なりふりかまうひまもなくなった。プロコフイの女房についてもいろいろに取り沙汰された。ある者は、これまで見たこともないような美人だというし、かと思うと、その正反對を主張する者もあった。女たちのなかでも一番のしたか者の、兵隊後家のマーヴラが、新しい麴もちをもらふりをして、ひと走りプロコフイのところへ行ってきた。プロコフイが麴を取りに穴蔵へおりて行ったそのあいだに、マーヴラは、プロコフイがおよそとんでもないトルコ女を背負いこんだのを見きわめてしまったのである……

しばらくたってから、顔を赤くほてらせたマ

ーヴラが、頭布うちずきを横つちよにずらせ、横丁に集まった女たちを前にしてしやべっていた。

「ほんとおの人だったら、おまえさんたち、あの女のとこがよくつてさ。女というならまだしも……ひよろひよでさ、ざまったらありやしない……こころじや娘つ子だつても、もうちつとふくらしているよ。胴なが、胡蜂はちまきのよう、二つに折れそうでさ。目ん玉は黒くって、きらきらして、おそろしいこった、まるで悪魔あくまみたいに刺してくるんだからね。きつと、お腹が大きいに相違ない、きつとそうだよ！」

「お腹が大きいのかえ？」と女たちはあきれた。

「あたしの目はごまかせないよ。これでも三人から手がけたんだからね」

「それで顔はどうさね？」

「顔かい？ 黄ろいよ。目が暗いけど、たぶんよその国だもんだから、気がはれないんだろさ。それからね、おまえさんたち、あの女のはいてるのが……プロコフイのズボンなんだよ」

「へえ、え、え？」女たちはびっくりしていっせいに叫んだ。

「この目で見てきたんだよ。ズボンをはいてるのさ、ただ側章そばしるし（コサック軍）が入ってないだけだね。きつと、あの人のふだんのをふんだくっちゃまったんだよ。長い上着を着ているんだけど、上着の下からズボンがはみ出して、それを靴下のなかへ突っ込んでるのさ。あたしやそれを見たたん、身うちがぞつとして……」

プロコフイの女房は妖術まじゅつをつかうという

噂が部落じゅうでさややかれた。アスターホフの家の嫁が（アスターホフの一家はプロコフイのところ、いちはん近いはずに住んでいた）、なんでも三位さん・体祭（神とキリストと聖霊にさげられた祭日）の二日目の、夜明け前に、プロコフイの妻が、かぶりものもかぶらず（革命前のロシアが外へ出るときはかならず頭布をかぶることとなつており、それを破るとはしたくない振舞いと非常に非難された）、はだしで、アスターホフの家のかきうちで雌牛の乳をしぼっているのを見た、と誓った。そのことがあつてから雌牛の乳房は、赤ん坊の握りこぶしほどにしぼんでしまい、乳が出なくなつて、まもなくくたばつてしまった。

その年はかつてないほどに家畜の瘟疫おんまがはやつた。ドンのはの畜舎では、雌牛や子牛の死体で毎日のように砂州がまだらになった。瘟疫は馬にうつった。村有の放牧場に遊ぶ馬群が、目に見えて減つていった。そこでまた横丁や通りを不吉な噂が這いまわつた……

部落の寄合いからコサックたちがプロコフイのところへやつてきた。

主人はお辞儀をしながら昇降口へ出てきた。

「何かご用ですかね、お年寄り衆？」

階段につめよつた群衆は、啞おどろのようにだまつていた。

ついに、一人の酒気をおびた老人がまっさきに叫んだ。

「おめえの妖婆まじまを渡せ！ 裁判にかけるだ！」

プロコフイはいっさんに家のなかへ駆けこんだ。しかし玄関で追いつかれた。リュシニヤ（荷馬車）のあだ名で通っている背の高い砲

兵が、プロコフイの頭を壁にぶちつけては、言いきかした。

「騒ぐな、騒ぐな、なんでもねえよ！……おめえをどうしようてんじやねえ。おめえの女房を埋めちまおうてんだ。家畜がなくなつて、部落が減ぢまうよりは、あの女をばらすほうがええんだ。おめえは騒ぐんじやねえ、でねえと、壁がぶつこわれるまで頭をぶちつけてやるぞ！」

「女をひきずりだせ、あん畜生を戸外へひきずりだせ……」階段のところで口々に叫んだ。

プロコフイと連隊のおなじだった男が、トルコ女の髪をぐるぐると手に捲きつけ、もう一方の手では、叫びを上げようと精いっぱいにかれた彼女の口をしつかり押えて、飛ぶように玄關を引きずつて行き、群集の足もとへ放り出した。吼えるようなどよめきをたらぬいて金切声がひびいた。プロコフイは六人のコサックを投げ倒して居間へとび込むと、壁から長剣をもぎとった。ひしめき合つて、コサックたちは玄關から退却した。どきどきするような長剣を音高く頭上にふりまわしながら、プロコフイは昇降口を駆けおりた。群集はふるえあがり、庭いちめんにもちらばった。

穀倉のそばで、プロコフイは逃げ足のおそい砲兵のリュシニャーに追いついた。そしてそのうしろから、左の肩から袈裟がけに腰のつけねまで斬りつけた。生垣から手ごろな棒をひきぬいていたコサックたちは、打穀場をぬけてんでに曠野へ逃れた。

半時もすると、元気をとりもどした群集はま

た屋敷におしよせてきた。二人の斥候が、身をちぢかめながら玄關へ入つていった。台所の敷居ぎわの血の海のなかに、プロコフイの女房が変てこに頭を投げだして、横たわつていた。苦しげにむきだされた歯のあいだには、噛み切られた舌がびくびくと動いていた。プロコフイは、頭をぐらつかせ、妙に据わつた目つきで、何やら真赤でねばっこく、びびり泣き声を立てるかたまりを、羊の毛皮の外套にくるんでいた——早産児である。

＊

プロコフイの女房はその日の夕方に死んだ。月足らずの赤ん坊は、祖母にあたるプロコフイの母親が、かわいそうに思つて引きとつた。

蒸したふすまでくるみ、馬乳を飲ませ、そしてひと月ばかりたつて、色の浅黒いトルコ種の男の児が丈夫に育ちそうだと見込みがつくと、教会へ連れていって、洗礼を受けさせた。お祖父さんの名をとつてパンテレイと名づけられた。プロコフイはそれから十二年たつて懲役から帰つてきた。短く刈り込んだ胡麻塩の赤茶けたひげと、ふつうのロシア服とが、彼をコサックとは似てもつかぬよそ者のようにしていた。彼は息子を引きとつて、一戸をかまえた。

パンテレイは、色の真黒い、きかん気な若者に育つた。顔とすらりとしたからだつきが母親似であつた。

プロコフイは彼をコサック女の隣の娘と結婚させた。

このとき以来、トルコ人の血がコサックの血とまじり合うようになったのである。こうして部落に、鉤鼻の、すごいほど美しいメレホフ家のコサックたち、あだ名では「トルコ人」が現われたのである。

父親をなくすと、パンテレイは家政に没頭した。屋根を葺きかえ、遊んでいる土地を半ヘクタールほど敷地にとつて、ブリキ屋根の新し納屋と穀倉を建てた。主人の注文で、屋根師は、穀ち落しで一对のブリキの鶏をこしらえ、それを穀倉の屋根にとりつけた。そののどやかな様子は、メレホフの屋敷を楽しげにし、また何不足ない裕福なものに見せた。

寄る年波にもパンテレイ・プロコフイエヴィチは頑丈だった。横幅が広がって、すこし猫背にはなつたが、まだまだどうして矍鑠たるものであつた。骨ばつていて、びっこをひき（若いころ天覧競馬で左足を挫いたのだ）、左の耳に半月形の銀の耳飾りをはめ、年をとつてもひげと頭髮の黒味が失せず、怒つたら最後、まるで氣違いのようになつた。おそらく、そのせいで、かつては美しかった女房を、年よりも早く老けさせてしまつたのだらう。彼女は、いまだには、顔じゅう蜘蛛の巣のような深い皺におおわれ、でつぷりとふとつていた。

もう妻帯している長男のペトロは母親似だった。小柄で、獅子鼻で、小麦色の髪はひどくちぢれ、栗色の目をしていた。下のグリゴリーは父親そっくりだった。六つも年下なのに、ピョートルより頭半分だけ背が高く、父親とおな

じ鉤^{かぎ}なりの垂れ鼻で、ちょっと目尻の釣りあがつた目には青ずんだ瞳が輝き、とがった頬骨は紅味をおびた浅黒い皮膚におおわれていた。父親に似てグリゴリーイは猫背で、微笑にさえも二人には共通の、猥^{わう}的なところがあった。

父親の気に入り娘のドゥニャーシカは、手の長い目の大きな少女である。それにベトロの妻のダリーヤと小さな子供——これがメレホフの全家族であった。

二

まだ明けやらぬ灰色の空にはまばらな星が揺れていた。風が密雲の下から吹きつけた。ドン^{ドン}の岸辺を、後足立って霧がながれ、白堊岩^{はいじやくがん}の山の斜面で何層にもなり、灰色の頭のない蛇^{へび}のように崖^{がけ}のあたりへ這いおりて行く。左岸の丘陵^{きゆうりやう}、砂州^{さしゅう}、入江^{いりやう}、蘆^{あし}のしげった沼地^{しづみ}、露^{つゆ}っぽい林——それらは、心を奪うような冷たい空^{そら}ばえに赤く色づいていた。稜線^{りやうせん}の彼方では、登りもやらず、太陽がもたえていた。

メレホフの屋敷では、パンテレイ・プロコーフィエヴィチがまっさきに眠りからさめた。歩きながら、小さな十字の縫いとりをしたルバーシカの襟のホックをかけ、昇降口の上へ出た。草の生えた庭は、銀色の露の玉をちりばめている。横丁へ家畜を出してやる。下着だけのダリーヤが雌牛の乳をしぼりに走って行く。白いむきだしのふくらはぎに、露の玉が初乳のようにはねかき、困^こいうちの草にぼうっと煙^{けむり}ったような踏跡^{ふみあと}がつく。

パンテレイは、ダリーヤの足に踏みつけられた草がまっすぐになるのをしばらく見つめていたが、やがて居間へ入った。

開け放たれた窓の敷居に、庭の実核^{じつかく}からちりこぼれた花びらが、艶^{えん}のないピンクの色を見せていた。グリゴリーイはうつぶせになり、一方の手を大きく投げ出して眠っていた。

「グリシシカ、釣りに行かんか？」

「何さ？」グリゴリーイは小声でたずね、寝台から足をたらしした。

「朝釣りに行こうや」

グリゴリーイは、鼻息を立てながら、衣箱^{いしやう}から普段ばきのズボンを引きおろし、白い毛編みの靴下に裾^{すそ}を突っ込むと、まくれた踵^{かかと}の革を直しながら、長いことかかotte短靴^{たんかく}をはいた。

「おっかさん、まき餌^えを煮てくれたかな？」父親のあとから玄関へ出てきて、彼はかすれた声でたずねた。

「煮てくれたよ。船のほうへいってくれ、わしもすぐ行く」

老人は蒸^もした香^{かほ}ばしいライ麦^{ライ麦}を壺^{つぼ}のなかへすくい入れた。落ちこぼれた粒を丹念に手のひらへかき集め、そして左足にからだの重みを托しながら、坂のほうへびっこをひいて行った。グリゴリーイは、ぶすつとした顔つきで、船のなかにすわっていた。

「どこへやるね？」

「黒崖^{くろがき}だ。こないだなんした、あの木株^{きこ}のそばでやってみようや」

船は、鰓^{うろこ}で河底^{かてい}を舌打ちして、ふわりと水に

うかび、岸を離れた。激流^{げきりゅう}が船をゆすって、横倒しにしそうにしながら押し流した。グリゴリーイは、漕^こがないで、櫂^かで舵^{かじ}をとった。

「漕いだらどうだ」

「じやあ、まんなかへ突きぬけようや」

急湍^{きゅうたん}を横切り、船は左岸に向って進んだ。部落からは時をつくる鶏^{けい}の音が、水面に高くこだましながら彼らを追いかけてくる。水面から切り口のようにそそり立っている黒い砂礫^{さだ}質^{しつ}の崖をふなべりに傷つけながら、船は淵^{ふち}についた。岸から十メートルばかりのところに、水底に沈んだ樅^{ぼん}の木^きの枝が何本も突き出ているのが見えた。そのまわりでは、渦^{うず}が茶色い泡のかたまりを追っている。

「糸をおろせや、わしが餌^えをまくで」父親はグリゴリーイに耳打ちして、湯気の出ている壺^{つぼ}の口へ手を突っ込んだ。

妻はばしりと水面に音を立てた、まるでだれかが小声で「しっ！」とささやいたようだった。グリゴリーイはふくれた粒を釣針^{つりはり}に刺して、にやりと笑った。

「大きい魚も小さい魚も、かかれ、かかれ」

いくつにもまるまって水中に落ちた釣糸^{つりいと}が、びんと張り切り、そしてまた弱まった。錘^{おもり}がちよっと底にふれたのだ。グリゴリーイは足で釣竿^{つりざん}のはしを押え、からだを動かさないようにしながら、煙草^{たばこ}入れをさぐった。

「だめだぜ、お父つあん、こいつは……かけ月だらうが」

「マツチ持ってきたか？」

「うん」

「火をたのむ」

老人は煙草を吸いつけて、木株の向う側でぐずついている太陽を見やった。

「鯉^{こい}ってやつは、いろんな食い方をするんだ。

かけ月でもすばらしいのがかかることがある」

「ちよつ、稚魚^{こい}めが餌^{えさ}をちぎりやがる」グリゴリーが吐息をついた。

船のそばで、びちゃりと音を立てて、水が逆流した。一メートル半もある、まるで赤銅を鑄出したような鯉^{こい}が、ごぼうの葉のように幅広いまがった尾で水面を二つほど叩いて、うめき声とともに空中にとび上がった。麦粒のようなしづきがさつと船に降りかかった。

「よし、待つとれ！」パンテレイはぬれたひげを袖でぬぐった。

沈んでいる榆^いの木^きのわき、長くのびたはだかの枝のなかで、同時に二匹の鯉^{こい}が跳ねた。いくらか小さい三匹ものは、空中にとびあがろうとして、いくども切岸のきわで跳ねた。

グリゴリーは手まき煙草のべとべとにぬれたはしをもどかしげに噛んだ。輝きのない太陽が昇った。パンテレイはまき餌^{えさ}を全部つかってしまひ、不興^{ふきよう}げに唇^{くちびる}をかんで、動かぬ釣竿^{つりざな}のさきをぼんやりとみつめていた。

グリゴリーは煙草の吸殻^{すいがら}をべつと吐きすて、それが矢のように飛んで行くさまを憎々しげに目で追った。こんなとんでもない時刻に叩き起され、ぐっすり眠らしてもらえなかったので、

彼は内心、父親に悪態をあげていた。すき腹へむやみに吸った煙草のために、口のなかがいやに焦^こげ臭く、ざらざらした。水を手ですくおうと、身をごめると、そのとたん、水面から四十センチほど突き出ている竿^{ざな}のさきが、弱々しく揺れて、ゆっくりと下方へ沈んだ。

「引^ひっかける！」老人がいきんだ。

グリゴリーは、あわてて竿^{ざな}を引いた。しかし竿^{ざな}の先はまっすぐに水中へもぐり、釣竿^{つりざな}は手元から籊^さのようにしわんだ。万力のように巨大な力が、強く張りきった柳の枝の釣竿^{つりざな}をしなわせた。

「離すな！」老人は、船を岸にぶつけまいとしながら、うめいた。

グリゴリーは竿^{ざな}を持ち上げようと力をこめたが、できなかつた。ぶつと音を立てて、太い糸^{いと}が切れた。グリゴリーは平均^{へいきん}を失って、よろけた。

「えい、こいつめ！」パンテレイは餌^{えさ}が針^{はり}にうまくつかず、つぶやいた。

興奮^{こうふん}して薄笑^{はくしょう}いをうかべながら、グリゴリーは新しい糸^{いと}を結んで投げた。

餌^{えさ}が底^{そこ}へとどいたと思う間もなく、竿^{ざな}のさきがぐつとまがった。

「きやがった、こん畜生！」グリゴリーは、急流^{きゅうりゅう}のほうへ突き進もうとする魚^{いさな}を水底^{すいぞう}から引き離^{はな}そうとがんばりながら、鼻^{はな}をならした。

糸^{いと}が、音高^{おんたか}くうなつて水を切った。そのあとから、緑色^{きょくしき}がかつた帯^{おび}のように、水がななめに盛り上がった。パンテレイは節^{ふし}くれた指^{ゆび}でたも

網^{あみ}の柄^{えい}をもちかえた。

「水のうにねかしちまえ！ ゆるめるな、でねえとぶつりだぞ！」

「大丈夫！」

大きな赤黄^{せきわう}ろい鯉^{こい}が水面^{すいめん}にあがってきて、水を泡^う立てた。そして円味^{えんみ}をおびた額^{ひら}のひろい頭^{あたま}をぐつとまげると、ふたたび深みへつつ走った。

「引きやがるな。手がきかねえってことよ……」

「ゆるめるな、グリーンシカ！」

「ゆるめるもんか！」

「気をつけるよ、船の下へやるじゃねえぞ！ 気をつける！」

ひと息^{ひといき}いれながら、グリゴリーは、横^{よこ}つ倒^{たふ}しになった鯉^{こい}を船^{ふね}のほうへ引き寄せた。老人は網^{あみ}を入れようとした。しかし鯉^{こい}は、最後の力をふりしぼって、また深みへ走った。

「頭^{あたま}をもち上げてやれ！ 風^{かぜ}をひと口^{ひとくち}くらわしてやりやあ、おとなしくなるんだ」

引きまわしておいて、グリゴリーはふたたび疲^{つか}れた鯉^{こい}を船^{ふね}のほうへ引き寄せた。大きな口^{くち}をばくばくやりながら、魚^{いさな}はざらざらしたふなべりに鼻^{はな}をぶつけ、じつとなった。オレンジ色^{オレンジいろ}がかつた黄金^{おうごん}のひれがふるえ、美しくきらめいた。

「やったな！」パンテレイは網^{あみ}で魚^{いさな}をすくいあげながら、満足^{まんぞく}気^きにのどを鳴らした。

なお半時間^{はんじかん}ばかりも釣^つっていた。鯉^{こい}のあばれる音が静^{しず}まった。

「切りあげようや、グリーンシカ。もうかかめるえ、このうえいても無駄なこった」

帰り支度にかかった。グリゴリーは船を岸から突きはなした。道の半分もきた。父親の顔色で、グリゴリーは、彼が何か言いだそうとしていたのを見てとった。しかし老人は押し黙ったまま、山麓に散らばった部落の家々を眺めていた。

「おまえ、なア、グリゴリー、なんだろう……」
「彼は足もとの袋の紐をいじりながら、思いきり悪く切り出した。「わしは前から気がついているんだが、おまえ、たしか、アスターホフンとこのアクシーニヤと……」

グリゴリーはひどく赤くなって、顔をそむけた。ルバーシカの襟が日に焼けたたくましい首筋にくいこんで、白い跡をつけた。

「ちったあ氣をつける、ええ」老人はもう荒っぽい、怒ったような調子になって続けた。「こんなことを言いたかあない。だがステパンは、うちとは隣同士だ、だからあれの女房とふざけたりすることは許せん。しまいにほんだことにならうも知れんで、そうならん先に言っとくのだ。こんど見つけたら——張り倒すぞ！」
パンテレイ・プロコフ・エヴィチは指を節くれ立った拳骨に握りしめ、とび出た目を細めて、息子の顔から血がひいて行くのを眺めていた。

「ひとの噂だよ！」まるで水中からひびくようなりつる声で、グリゴリーはぼつと言い、父親の青味をおびた小鼻をまともに見返した。

「へらず口をたたくな」

「いろんなことを言うやつがあるから……」

「だまれ、こいつめが！」

グリゴリーは櫂をとって、船は飛ぶように走り出した。船尾のところで、やわらかにうねる水が渦をまいて踊った。

船着場まで二人はだまり通した。もう岸へ着くという時分になって、父親は念を押した。

「いいか、忘れちゃならんぞ、でねえと、今夜からでも、けっしてあそび場には出さんからな。うちから一步も出さんぞ。わかったな！」

グリゴリーはだまっていた。船を岸に着けながら、たずねた。

「魚はうちの女たちにやるのかい？」

「商人のとこへ持ってって売ってきな」老人は氣持をやわらげた。「煙草代にすりゃあええ」

唇を噛みながら、グリゴリーは父親のあとに従った。『やって見るがいいや、親父さん、三本脚(野營地などで馬の三本の脚をしばって放し飼いにした)』をしばらくたつて、今夜は行って見せるから』きり立った父親の後頭部を、噛みつかんばかりにねめつけないながら、彼は考えた。

家に帰ると、グリゴリーは鯉のうろこにこびりついた砂を丹念に洗い落し、鰓のところへ枯れ枝を突き通した。

門の前で、幼な馴染(なじみ)でおない年のミチカ・コールシュノフとでつくわした。ミチカは、歩きながら、飾りのついた帯の先をもてあそんでいる。狭い裂目の奥から小生意気なまるっこい目が黄色くきらつき、瞳は——猫の瞳のようで、

釣り上がっている、そのためにミチカの眼差はさだまらず、捉えがたかった。

「魚なんぞぶら下げてどこへ行くんだ？」

「きょうの獲物よ。商人のとこへ持って行くんだ」

「モホフンとこか？」

「そうよ」

ミチカは目分量で鯉の目方をはかつて見た。

「十五フント(四百グラムは約)」ぐらいか？」

「半。かけて見たんだ」

「持ってけよ。おれがかけあつてやろうや」

「行こう」

「割を出すか？」

「大丈夫、余計なことを言うな」

弥撒がえりの人々が通りに散らばっていた。『シャミリー(ダゲスタンの民)』のあだ名で通っている三人兄弟が、肩を並べて歩いて行った。

上の兄の、手なしのアレクセイがまん中を歩いていた。窮屈な軍服の襟が、筋ぼった彼の首をまっすぐに立て、くさび形のちぢれたまばらな顎ひげが、気短かそうに横にはり出し、左の目が神経質にまたいたっている。よほど前のことだが、射的場でアレクセイのにぎっていた小銃が破裂して、遊底の破片が彼の頬を傷つけた。それ以来片方の目が、別にわけもなくまたたくのである。青味がかった傷あとは頬を突っ切つて、ちぢれた毛髪の中にまでくいこんでいる。左手は肘のつけ根からなかったが、しかし片方の手だけでも、アレクセイは、やり損いもせず、うまいこと煙草を巻いた。煙草袋を盛り上がっ

た胸板におしつけ、要るだけの紙を歯ではぎ取り、それをじょうごの形に折って、煙草をつめ、どうやるのか、五本の指をうまくつかって、巻く。あつと思ふまもなく、もうアレクセイは、できあがつた紙巻煙草をくわえて、またたきしながら、火を貸してくれと言うのである。

片手ではあつても、部落一番の拳闘家である拳闘といつても別に、特別ではなく、瓢箪ほどの大きさが、しかしつだったか、耕作の最中に雄牛に腹を立て、鞭が見つからなかつたので、拳固でなぐりつけたら、雄牛はあぜにへたばり、耳から血を流し、やつと息を吹きかえしたというようなことがあつた。あとの二人——マルチンとプロホルは——こまかいところまでアレクセイに似ている。同じように背がずんぐり短くて、榎の木のように胸幅が広い。ただ手だけは二人ともちゃんとそろっている。

グリゴリーはシャミリー兄弟に挨拶した。ミチカはぼきんと音のするほど頭をそむけて、通り過ぎた。謝肉祭の拳闘競技で、アレクセイ・シャミリーは、ミチカの若い歯を情け容赦もなく力いっぱいになぐりつけた。ミチカは、釘をうった踵でぞくぞくに傷のついた青黒い水の上に、臼歯を二つ吐き出したのである。彼らと並んだとき、アレクセイは五度ばかりたて続けにまたたきをした。

「その長いやつ、売ってくれるか？」

「買えや」

「いくらだ？」

「牛のつがいに、女房を一人おまけにつけてく

れ」

アレクセイは目を細めて、肘までしかない手を振った。

「変り者め、ほつ、変つてやがる！ うは：は：は、女房だと……仔ができたらひきとるか？」

「おめえ、自分の種付場に残しといたほうがいいぜ、でねえと、シャミリーが種なしにならあ」グリゴリーはひやかした。

教会の垣に面した広場に人だかりがしていた。教会執事が、群集にかこまれ、鷺鳥を頭の上に差し上げて、叫んでいた。「五十カペーク。落すぞ。その上、いないか？」

鷺鳥は首をまわして、人を小ばかにしたようにトルコ玉のような目をほそめた。

その隣では、胸に十字勲章とメダルをぶら下げた白髪の小柄な老人が、人の輪のなかで手を振っていた。

「うちのグリシャカ爺さんが、露土戦争のほらを吹いてるんだ」ミチカがそのほうに目配せした。「聞いていかねえかい？」

「聞いてるうちに、鯉が臭くなつて、ふくれっちまわ」

「ふくれたら——目方がついて、とくだぞ」

轆のこわれたポンプが、乾いてひびの入るままにはつたらかしてある消防小屋の向うの広場に、モホフの家の緑色の屋根が見える。小屋のそばまでくると、グリゴリーはつばを吐いて鼻を押えた。ポンプのかげから、ズボンのボタンをはめながら、尾錠を口にくわえて、一人の老人が這い出してきた。

「こらえられなかったか？」ミチカが毒づいた。老人はボタンをはめおわると、口から尾錠を出した。

「よけえなお世話でねえか？」

「鼻を糞んなかへつつ込んでやろうか！ その顎ひげをよ！ 顎ひげを！ 婆さんが一週間かかっても洗いおとせねえようにな」

「てめえの鼻を、畜生め、つつ込んでくれるわ！」老人は腹を立てた。

ミチカは猫のような目をまぶしそうに細めてつつ立っていた。

「ふん、お上品ぶりやがつて。失せやがれ、畜生！ 何をからむだ？ まごまごすると革紐をぶっくらわせるぞ！」

にやにや笑いながら、グリゴリーはモホフの家の昇降口に近づいていった。欄干には——野葡萄がいちめんに巻きつき、階段の上にもうげな淡い影を落している。

「へえ、ミトリイ、たいしたもんだな……」

「ハンドルまで、金めつきだぜ」ミチカはテラスへ通する扉を細目にあげ、鼻息を荒くした。

「いまの爺いをごへ連れてくるんだつたな」

「だあれ？」とテラスから声がかかった。おずおずと、グリゴリーが先に立った。ペンを塗った床板の上を鯉の尻尾がひきずった。

「だれにご用？」

籐の揺椅子に——娘がこしかけている。手には苺を盛った皿を持っている。グリゴリーは、苺をくわえているふっくらしたハート型のばら色の唇をだまってみつめた。頭をかしげて、娘

は客を眺めまわした。

ミチカがグリゴリーを助けに出た。彼は咳ばらいをした。

「魚を買いませんか？」

「お魚？ あたし言つてあげる」

彼女は肘椅子をひと振りして、立ち上がりながら、素足にはいた縫い通りのしてある上靴をとんと鳴らした。陽光に白い服が透けて、ミチカは肉づきのいい脚のぼんやりした輪郭と波立つように揺れるスリッパの広いレース模様を見た。むき出しのふくらはぎの縞子しまこのような白さが彼を驚かせた。まるとい踵のところだけ、皮膚が乳のように黄いろくなつていた。

ミチカはグリゴリーを小突いた。

「見ろや、グリーンシカ、ほら、スカートがよ……ガラスみてえにすっかり透き通つて見えら」娘は廊下の扉から出てきて、ふわりと肘椅子に腰かけた。

「台所へ行つてくださいな」

爪先歩きで、グリゴリーは家のなかへ入つていった。ミチカは片足をうしろへ引いて、二つの黄金いろの半円に髪の毛を分っている、彼女の頭の白い線に目を細めていた。娘は大胆な落ち着かぬ目で彼を眺めた。

「あなた、こちらのかた？」

「ここのもんです」

「なんていうお家？」

「コールシュノフ」

「じゃ、お名前は？」

「ミトリイ」

彼女はばら色の爪をしげしげと眺め、すばい動作で足を組んだ。

「どなたが魚をとるの？」

「グリゴリー、友達でね」

「あなたは、釣りをなさる？」

「気が向きさえすりゃ、行くけど」

「釣竿で？」

「竿でも釣るな、ここらじゃ、張り釣つて言つてるけど」

「あたしも一度釣をしたんだけど」彼女は、しばらく黙つてから言つた。

「なに、よけりゃ、いっしょに行きゃいい」

「どうすればいいかしら？ いいえ、まじめよ！」

「えらく早起きをしねえとな」

「あたし起きてよ、起きてさえもらえれば」

「起すのはいいけど……親父おとうさんが？」

「父がなに？」

「ミチカは笑い出した。

「泥棒とまちがえて……そのうえ、犬なんかけしかけられちゃ」

「馬鹿ねえ！ あたし、角の部屋へひとり寝るのよ。ほら、あの窓よ」彼女は指で差して見せた。「呼びに来てくださるなら、あすこの窓を叩いてよ、そしたらあたし起きるわ」

台所で早口の話し声をした、おどおどしているのが——グリゴリーの声で、太く、ねばっこいのが——料理女の声だ。

ミチカは、コサック帯のいぶし銀をもてあそびながら、黙っていた。

「あなた、奥さんいるの？」押しこらしたような微笑をほころばせながら、きいた。

「なんで？」

「別に意味はないけど、きいてみたのよ」

「いや、独身さ」

ミチカはふいに真赤になった。が彼女のほうは、微笑を浮べ、床に落ちた温室物の苺の茎をもてあそびながら、たずねた。

「どう、ミーチャ、娘さんたちにもてる？」

「もてるときもあれば、もてないときもあるさ」

「おっしゃいよ……でも、どうしてあなたの目、猫みたいなの？」

「猫みたい……だって？」ミチカはすっかりうろたえた。

「ええそうよ、まるで猫みたいよ」

「おふくろのせいさ、きつと……おれの知ったことかい」

「だけどどうして、ミーチャ、結婚さしてもらえないの？」

ミチカは、ちよつとの間とまどつたが、すぐ立ち直り、彼女の言葉のなかにかすかな嘲弄を感じて、黄いろく濁つた目を光らせた。

「大事なものがまだ大きくならねえのさ」

彼女はびっくりして眉を上げ、真赤になった。そして立ち上がった。

通りのほうから階段を上ってくる足音が聞えた。

いまにも笑いだしそうな彼女のつかの間の微笑が、ミチカを刺草いらくさのようにつついた。家の主

人の、セルゲイ・プラトノヴィチ・モホフが、ゆったりした羊皮の編上靴をやわらかくきしませながら、道を聞いたミチカのそばを、重々しく、肥満したからだを運んでいった。

「わしのところへかな？」そばを通り過ぎながら、ふり向きもせずに、きいた。

「あのね、お父さん、お魚を持ってきてくれたのよ」

グリゴリーが手ぶらで出てきた。

三

グリゴリーは、一番鶏を聞いてあそび場から帰ってきた。玄関から、醗酵しすぎたホップの匂いと、乾したじやこう草のつんとくる匂いが鼻をついた。

足を爪立てて部屋へ通り、着物を脱ぎ、側章のついた外出用のズボンを丁寧に懸けて、十字を切り、横になった。床の上には——窓枠の十字で断ち切られた月光の金色のまどろみ。部屋の隅の、縫とりのしてある手拭いの下には、銀めっきの聖像のほの暗い光。そして寝台の上の垂れ飾りのあたりに、眠りをさまたれた蠅のにぶく長々しい羽音。

とろとろとしかかったかと思うと、台所で兄の子供が泣き出した。

油の切れた荷車のように揺籠がきしんだ。ダリーヤがねぼけ声でぼやいた——

「ちよっ、しよのない鉄鬼だよ！ 眠れやしないじゃないか」そして静かに歌い出した。

ねんねんよ、おころりよ、坊やのお守りはどこ行った。お馬を見つけに行きました。

どんなお馬が見つかった？

金のかざりの鞍おいた

りっぱなお馬が見つかった……

グリゴリーは、規則正しい揺籠のきしみにさそわれて眠りに落ちながら、思い出した。

「あした、ペトロは野営にでかけるんだっけ。

ダーシカは赤ん坊と残る……あいつの留守に草を刈るようになるな。きつと」

熱い枕に頭をうずめたが、しつこく歌が耳につき、

おまえのお馬はどこ行った？

ご門の前におります。

それではご門はどこにある？

水めがさらって行きました。

甲高い馬のいななきがグリゴリーを揺り起した。声でペトロの軍馬とわかった。

眠気に力の抜けた指で、長いことかかってシヤツのボタンをはめていたが、よどみなく流れる歌のうねりに揺られて、またうとうとと眠りかけた。

それでは驚鳥はどこ行った？

葦のしげみに逃げてった。

それでは葦はどこにある？

娘がすっかり刈り取った。

それでは娘はどこ行った？

みんなお嫁に行きました。

コサックたちはどこ行った？

みな戦争に行きました……

ねぼけまなこで、グリゴリーは既までたりつき、馬を横丁へ引き出した。飛んできた蜘蛛の巣が顔をこそぐり、それでふいに眠気が失せた。

ドンの河ぞいをななめに、人影もない街道が月光をあびてゆるやかにうねっている。ドンの岸辺に霧がこめ、高みには星くずが白んでいる。馬はうしろで用心深く足を踏みかえる。水へおりのに足場が悪いのだ。向う岸で鴨が鳴いている。岸近い泥のなかでは、小魚を追う鯉が身をひるがえし、水面にぼちゃりと音を立てる。

グリゴリーは長いこと水ぎわに立っていた。淀んだ水のしめっぽい匂いが岸に息づいていた。馬の口からこまかな水滴が落ち散った。グリゴリーの心にはかるやかな快い空虚がある。心地よく、何思うこともない。帰りがけに、東のほうを眺めると、そこはもう青い闇がうすれていた。

厩のそばで母親に出あった。

「おまえかえ、グリーンシカ？」

「そうだよ」

「馬に水を飲ましたかえ？」

「飲ましたよ」気がなさそうにグリゴリーが答える。

「反り身になって、母親は前掛けに入れた乾糞を焚口へ運んでゆく、しなびたはだしの足を年寄りくさくさべたべたいわせながら。」

「アスター・ホフんとこを起しに行つてやつたらステパンもうちのベトロといっしょに行くのだ。」

ぞつと寒気がして、グリゴーリイは自分の身内に、張り切つたふるえるばねをはめこまれたようになる。総身が鳥肌立つ。アスター・ホフの家をよくひびく昇降口を、三段とびに駆けのぼる。戸には鍵がかかつていない。台所に蒲団を敷いてステパンが眠っている。彼の腋の下に妻の頭がはさまっている。

白んできた暗闇の中に、グリゴーリイは膝の上までまくれたアクシーニヤの襦袢と、はずかしげもなく投げだされた白樺の木肌のように白い脚を見る。ちらと見やるなり、口のながかひあがり、があとと頭がしびれるのを感じる。

盗むようにあたりを見回し、まるで別人のようになしやがれ声になって言った。

「おい、だれもいねえのかい？ 起きろよ！」

アクシーニヤがねぼけ声を出した。

「あら、だあれ？ だれさ？」襦袢をひつ張つて、彼女のむき出しの手が、両足のあいだをせわしく探り、もがきまわる。枕の上に、眠りながら落したよだれのしみが残っている。夜明け前の女のねわりは深い。

「おれだよ。おふくろが起してこいつて言ったんだ……」

「すぐ起きる……入っちゃいけないよ……蚤が

いるんで、床の上へ寝てるのさ。ステパン、起きなさいよ、ねえ？」

その声でグリゴーリイは、彼女がきままり悪がつているのを察し、いそいで外へ出る。

*

部落からは、五月の野営に三十人ばかりのコサックが行く。集合地は——練兵場。七時頃になると、幌をかけた荷馬車や、帆布製の合着のシャツを着た、いでたちを固めたコサックたちが、徒歩や乗馬で練兵場のほうへ続いた。

ベトロは昇降口の上で、はこるびた草紐を大あわてで縫い合わせていた。パンテレイ・ブローフ・エヴィイチは、ベトロの馬のまわりを歩きまわり、かえば桶へ燕麦をふりまいてやりながら、ときたま、大声でどなっていた。

「ドクニヤシカ、乾パンを袋へ入れたか？」

脂肉には塩をふったかえ？」

頬つべたを真赤にしたドクニヤシカは、台所と母屋のあいだを燕のように駆けまわり、父親の叫びを笑って受けながした。

「お父つあんはお父つあんの仕事をすればいいの、あたしは兄さんの荷物を、チエルカッスクまで行つてもびくともしないように、しっかりこしらえたげるから」

「食つちまったかな？」ベトロが、蠟引糸につばをつけ、馬のほうをうなずきながらきいた。

「まだ食つとるよ」父親はざらざらした手のひらで鞍褥をしらべながら、落ちついて答えた。

「なんでもねえようだが、ちっぽけなかけらひとつ、草つ葉ひとつ鞍褥にくつついてても、一

日乗っていると、馬の背を血だらけに擦りむいちまうもんだ」

「栗毛に水を飲まさないけりや。お父つあん、飲ましてくれんかね」

「グリニシカにドンへ連れていかせよう。おい、グリゴーリイ、馬を連れて行つてこい！」

背が高く、ごつごつした感じで、額に白い星のあるドン種の馬は、じつ然ながら歩きだした。グリゴーリイは馬をくぐりの外にひき出し、首のつけ根に軽く左手を触れてその上にとび乗ると、いきなり大股の跑足で駆けさせた。坂の近くで止めようとしたが、馬は脚を踏みちがえて、歩度ははやめると、とぶように坂を駆けくくった。ほとんど馬の背に仰向けになるほどうしろへ反った拍子に、グリゴーリイは、桶を担つて坂を降りてくる一人の女を見た。馬を小道からそらし、巻きあがる砂ぼこりをのこして、水の中へ飛びこんだ。

上からは、からだを揺すりながら、アクシーニヤが降りてきた。そしてまだ遠くから大声で叫んだ。

「気違い！ あぶなくひっかけられるところだったじゃないか！ 待つといで、あんたがどんな乗りざまをするか、お父つあんに言いつけてやるから」

「まあ、まあ、お隣さん、怒りなさんな。亭主を野営へやつちまえば、おれのようなもんでも、また手助けになるかも知れねえぜ」

「なんの、あんたなんか、悪魔のほうがましだよ！」